

公開シンポジウム 旅が育む家族の絆と人間性 Part 5

～未来ある真の“旅育”のために～

実施担当研究員：森下晶美（国際地域学部・准教授）、松園俊志（国際地域学部・教授）、
島川 崇（国際地域学部・准教授）

開催日時：平成 24 年 12 月 8 日（土曜日）13:00～16:30

場 所：白山第二キャンパス B-111 教室

対 象：大学生、教員、教育関係者、一般など

参加者：99 名（学生 68 名、一般 26 名、教員・講演者 5 名）

参加費：無料

後 援：社団法人日本観光振興協会

1. 事業の目的と背景

“食育”をはじめ、〇〇育と名付けられ、生活の中の素材を子どもの教育要素としていこうとする取り組みは多い。“旅育”という言葉もそのひとつであり、2007 年くらいから散見するようになった。一般的には、旅を子どもの教育に役立てていこうとする取り組みと考えられている。しかし、「旅育とは何か」といった根源的な議論はほとんどなされておらず、一部の企業が体験学習や家族旅行を旅育と称した商品化を行っているのが実情である。こうした動きは、食育という言葉が乱用され本来あるべき姿を見失いつつある食育の現状を彷彿させる。旅育も安易に乱用すると、せっかくの取り組みが陳腐化し胡散臭いものになりかねない。

このシリーズのシンポジウムでは、過去 4 回に渡り、旅育と家族旅行をテーマに、講演やパネルディスカッション、旅による子どもへの影響の調査などを行ない、特に、「旅育とは何か」という旅育の定義を考える取り組みには力を入れてきた。第 5 回目となる今回のシンポジウムでは、これまでのシンポジウムでアプローチしてきた内容を総括すると共に、食育の失敗を繰り返さないために旅育はどうすべきかを考え、また、“旅育”を未来ある真の旅育とするためには何が必要かを探る取り組みとする。

2. 事業実施内容

11 月下旬より、当研究所ホームページ、チラシ配布、日本国際観光学会へのメール案内などにより広報を行なった。シンポジウム当日は、本学学生 68 名、一般 25 名（産業界関係者、他大学教員、一般）など、合計 99 名が参加した。

シンポジウムでは、食育の専門家である幕内秀夫氏（フーズアンドヘルス研究所・代表）、社会科学教育の専門家である寺本潔氏（玉川大学教育学部・教授）による講演と、これまでの内容を総括するために担当研究員 3 名によるトークセッションを行った。

詳しいプログラムは以下の通り。

【シンポジウムの構成】

13:00～14:00 講演1「食育の失敗から旅育は何を学ぶべきか」 幕内秀夫氏（フーズアンドヘルス研究所代表）

14:10～15:10 講演2「思考・判断・表現力の幅を拓げる旅育の力」 寺本 潔氏（玉川大学教育学部・教授）

15:20～16:10 トークセッション「未来ある真の旅育のために～これまでのシンポジウムを受けて～」

松園俊志（東洋大学国際地域学部・教授）

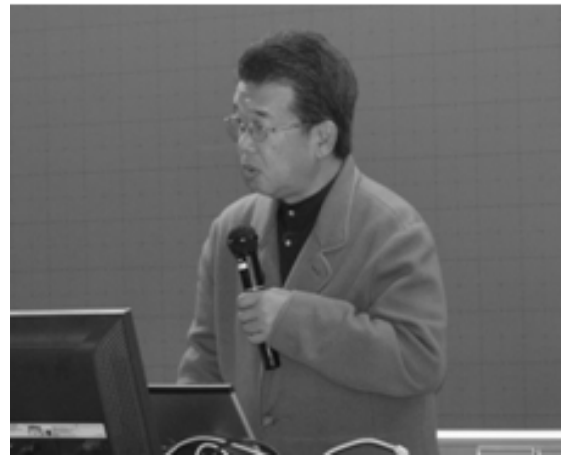
島川 崇（東洋大学国際地域学部・准教授）

森下晶美（東洋大学国際地域学部・准教授）

（1）講演1「食育の失敗から旅育は何を学ぶべきか」幕内秀夫氏（フーズアンドヘルス研究所・代表）

第一の講演として、フーズアンドヘルス研究所・代表の幕内秀夫氏に、食育の失敗の原因と旅育が同じ轍を踏まないためにどうすべきかについて話を伺った。

食育については、2005年からマクドナルドがハンバーガーを、2007年からはカルビーがポテトチップスを使った食育を表明するなど、いわゆるジャンクフード業界の参入で本来あるべき方向性を見失いつつあるのが現状であるが、幕内氏は、食と旅（風土・文化）との関連にふれながら、平成



幕内秀夫氏

17年に食育基本法が制定されたことによって、それをビジネスにしようと

するジャンクフード業界の食育への進出などを招き、かえって食生活の情報の混乱が生じたことが、食育の失敗の一因となったと述べた。

さらに、同氏は、食育の失敗の根本的問題は、こうした産業界の動きよりもむしろ、元来ある栄養教育というものが実際にはきちんと役立たなかったことが大きな原因であると述べ、そのために、食育インストラクターなど民間資格が登場しあらゆるものが食育となってしまったこと、また、食育に対し行政から費用対効果の不要な公的予算がつき、行政からの天下りやその予算を目当てにした産業の進出や取り組みが意味もなく増えたこと、などその弊害を説明した。

また、食育と旅育の類似点にも触れ、食や旅の効果はエビデンスが分かりにくい（すぐに結果が出ない）ため、その効果を数値化しようとしやすい。しかし、そもそも旅や食事は因果関係が立証しにくいものであり、それを無理に数値化しようとする、旅そのものが本来持つ価値まで懐疑的にしてしまう可能性があり、注意が必要であるとまとめた。

（2）講演2「思考・判断・表現力の幅を拓げる旅育の力」寺本潔氏（玉川大学教育学部・教授）

続く第二の講演では、社会科教育が専門で各地の小学校で旅育授業を実践している玉川大学教育学部教授・寺本潔氏に、旅育は子どもにどのような影響を与えるか、その可能性について話を伺った。



寺本 潔氏

寺本氏は、各地の小学校で実践している旅育授業の事例を取り上げながら、旅行を題材に授業をすると子どもたちの興味が大きい、初等教育から旅を扱う必要性があるのではないか、とした上で、旅育は、空間的な移動を伴う実際の旅行体験や異文化に関連する事前事後の学びによって、視野の広がりや寛容な心を持つことを狙いとした教育的な行いであり、その際、旅育が子どもの心身の成長、発達にとってプラスの作用を及ぼすことを保護者や自己が自覚していることが重要である、

と述べた。特に、場所と空間的移動の持つ意味は重要で、自分のいる場所の認識は、母語や文化と

いった自分自身のアイデンティティの認識に他ならず、また、そこから移動した他所での見知らぬ場所や人との出会いはまさに場所の持つ効力であり、旅育である、とした。従って、旅行の際に乗り物に乗っても窓から景色を見ないのはナンセンスで、空間移動のつながりを認識することも重要である、と説明した。

また、旅行における家族や同行者とのつながりにも触れ、家族や同行者とのつながり意識を醸成できることも旅育の力であるとし、観光学習で育成される技能や態度には、情報を収集する力、情報の活用力、対人関係力、批判的思考力、問題解決の姿勢、関心や起業など多くの効力があると述べた。その上で、しかし、旅育によってどんな力が身につくのか、誰がそれを担うべきか、といった研究はまだほとんどなされていない、とこれからの研究の必要性も指摘した。

若い家族は子どもと一緒に自分も満喫したい、自分も旅で成長したいと思っている、その意味では旅育に家族の成長や意味を感じ取れることが大切で、「いつ、どこに行くのか」から「どこで何をするのか」といった家族旅行の高度化と旅育の自覚化が求められている、これが実現できれば、旅育に時間と費用をかける時代が必ず到来するはずだ、とまとめた。

（3）トークセッション「未来ある真の旅育のために～これまでのシンポジウムを受けて～」

松園俊志（当研究所研究員／国際地域学部教授）、島川崇（当研究所研究員／国際地域学部准教授）、森下晶美（当研究所・研究員／国際地域学部准教授）

上記3名の研究員は、2008年度より本事業計画に携わってきたが、これまでのシンポジウムを振り返り、まずは、それぞれが旅育をどうとらえているかについて発言した。

最初に森下は、①産業界による旅育の取り組みの現状、②これまで行った旅の効果に関する調査データ、③これまでのシンポジウムでの各氏の発言の共通点をまとめ、旅育の定義を「旅育とは、旅は人間性の成長を促すとする考え方で、旅によって得られる知識や興味・価値観の広がり、共感力を人の成長に役立てようとするもの。旅育には3つの要素があり、a.旅の体験（異文化・非日常体験、旅先での交流など）、b.人との時間共有（家族・友人との共通体験、思い出づくり、日常と比較した共有時間の長さなど）、c.旅を素材とした教育（職業教育、郷土教育、地理・歴史教育、国際化教育など）、最も効果的な旅育にするためには、これら3つの要素を全て満たすこと

が必要である。」と述べた。



続いて、島川は、自身が実践している家庭での旅育に触れ、家族旅行だからこそ本当の旅育が出来る、旅行に行くことで家族のいやな面を見ることもあるので、旅行に行きさえすれば旅育になると考えるのは誤りではないか、また、親のエゴだけで子どもを旅行に連れていくのはいかなものかと、旅育の持つ問題点の部分も指摘した。また、旅育を旅行需要の創出に使おうとすることにも問題があると述べた。その

上で、旅育は子どもだけでなくその過程を通じて親も育つことが出来る、と述べ、旅育の持つ可能性をまとめた。

最後に、松園は、産業界が体験学習を旅育と呼び、単なる商品化や利益のために利用するとせっかくの旅育が矮小化されるのではないかと懸念を表し、旅育の価値の高さを産業界がもっと認識し CSR (Corporate Social Responsibility/企業の社会的責任) として取り組んでいくべきではないかと述べた。また、ヨーロッパの学校における旅行の位置づけと日本におけるそれを比較し、ヨーロッパでは旅の価値をきちんと認識しており、家族旅行などの休暇にも寛容だが、日本の場合は、旅行をレジャーとしてしか位置付けられておらず、授業に遅れるとして夏休みなどの決まった時期にしか旅行に行くことが出来ない。旅育を推進するためには、日本のこうした価値観を変え、家族旅行に出掛けられる環境を整えていくことも必要ではないかとまとめた。

また、森下は、これらのトークセッションでの意見を総括し、観光産業界が旅育の価値を認識すると共に、われわれは研究分野に携わる者として、まずは、旅育の価値 (= 旅の価値) の整理を進めていく必要があるのではないかとまとめた。

3. 事業の成果

この事業では、旅育をテーマに 2008 年より 5 回に渡り公開講座とシンポジウムを行い「旅育とは何か、また、どうあるべきか」を考えてきたが、特に、講演者、パネリストなどからも幅広く旅育についての考えを述べてもらい、多方面から旅育の定義にアプローチすることが出来た。

(1) “旅育”に関する各氏のコメント () 内の肩書はいずれも講座開催当時のもの。

・新倉武一氏 (財団法人日本交通公社会長、社団法人日本ツーリズム産業団体連合会 (TIJ) 広報啓発委員長)、2008 年 12 月、第 1 回公開講座

「旅を子どもの教育に取り入れることで、子ども達の旺盛な好奇心を刺激しその視野を広げることができる。またそれによって環境問題を考えることや将来の職業選択を含めた生き方探しのヒントにつながるのではないかと」

・小林英俊氏 (財団法人日本交通公社常務理事、北海道大学大学院・東京大学・琉球大学非常勤

講師) 2009年12月、第2回公開講座

「感受性を豊かにするには能動的に関わることが大切で、観光はまさしく非日常的なものを「見る」能動的な行為であり、旅を通じて学ぶことができるのは、感じる力、洞察力、組み立てる思考力、地域を見る目、生きる楽しさ、生きる知恵などさまざまである」

・柵木鬼美夫氏(社団法人日本ツーリズム産業団体連合会・前事務局長)、2010年12月、第3回シンポジウム

「“旅育”というものが、食育のように誰もが簡単に使えることによって本来のあるべき姿を見失ってしまわないようにしなければならない」、「海外旅行をすることによって、例えばアメリカのような他民族国家の中では、価値観の違いを自ら学ぶことができる」

・迫田健太郎氏(社会福祉法人あすみ福祉会常務理事、茶々すずや保育園園長)、2010年12月、第3回シンポジウム

「子どもは育てるのではなく育つもの、その環境を提供するのに旅育は有効」

・岡田美奈子氏(財団法人日本交通公社観光文化事業部)、2010年12月、第3回シンポジウム、2011年12月、第4回シンポジウム

「家族旅行で培われる力は5つの“C”、Curiosity(好奇心)、Challenge(行動力)、Creativity(創造性)、Consideration(思いやり&協調性)、Confidence(自信)であり、成長段階に応じた家族旅行が“生きる力”を育む」

・沢登次彦氏(㈱リクルート 旅行ディビジョン じゃらんリサーチセンター センター長)、2011年12月、第4回シンポジウム

「家族旅行には、家族の絆を深める効果や現地の地域文化を知ることで学ぶ意欲や交流意欲が高まるといった効果がある、旅育を推進していくためには、こうした“家族旅行(旅育)の価値の可視化”をする必要がある」

・寺本潔氏(玉川大学教育学部教授)、2011年12月、第4回シンポジウム

「旅育は、情報収集・活用、対人関係、批判的思考、問題解決、報告、関心、起業など、子どものさまざまな力を養うことができ、また、家族旅行は家族による協同作業が家族のつながりを深める」、「日本では学校教育としての旅育が未発達であり、旅育の担い手が不明確である」、「いつ、どこに行くのか」といった旅行から「どこで、誰と何をするのか」といった(中略)家族旅行の高度化と旅育の自覚化の重要で、「かわいい子には旅をさせよ」の今日的意味づけも必要である」

・島川崇氏(東洋大学国際地域学部准教授)、2011年12月、第4回シンポジウム

「家族旅行や旅育は、(効果がある半面) 普段十分な愛情を子どもに注がない親の愛情欠如の言い訳として利用される危険性もあるのではないか」

・松園俊志氏(東洋大学国際地域学部教授)、2010年12月、第3回シンポジウム及び、2011年12月、第4回シンポジウム

「日本において旅の効果が軽視されている中、“旅育”を定義することは非常に重要な意味を持つ」、「旅育や家族旅行を推進するためには日本の休暇制度も併せて考えていかねばならない」

(2) コメントの共通点

各氏のシンポジウムでの発言から共通事項を探ると、“旅育”の有効性について、次の3つの点

を指摘することができる。

- ① 旅の体験による興味や学習意欲の喚起（好奇心、感じる力、視野が広がる、地域を見る目、学ぶ意欲、関心など）
- ② 人との交流（対人関係、価値観の違い、思いやり&協調性、家族の絆、交流意欲など）
- ③ 教育素材としての旅の利用（洞察力、環境の提供、行動力、創造性、情報収集・活用、批判的思考、問題解決、報告など）

（3）旅育の定義 — “旅育” とは —

こうした取り組みを通じて、旅育の定義は次のように考えることができる。

『旅育とは、旅は人間性の成長を促すとする考え方で、旅によって得られる知識や興味・価値観の広がり、共感力を人の成長に役立てようとするもの。旅育には3つの要素があり、①旅の体験（異文化・非日常体験、旅先での交流など）、②人との時間共有（家族・友人との共通体験、思い出づくり、日常と比較した共有時間の長さなど）、③旅を素材とした教育（職業教育、郷土教育、地理・歴史教育、国際化教育など）、最も効果的な旅育にするためには、これら3つの要素を全て満たすことが必要である。』

つまり、①、②については旅そのものの教育的効果であり、旅育の一要素ではあるが、①～③個々の要素だけでは十分な旅育効果を得ることは難しい。3つの要素を全て満たしてこそ、相乗的に旅育効果が期待できるといえる。③については、学校や産業界による旅育授業として行うだけでなく、家族によって旅を素材に行うことのできる教育も多いと考える。

以上のように、シンポジウムなど通じ旅育の定義にアプローチし、観光が成長過程の子供の人間性形成や教育にどう貢献できるかを考えてきたが、このテーマは、近年、社会問題にもなっている家族のあり方・つながりや旅行の価値創造についてもあらためて考えるきっかけとなった。また、5回の公開講座、シンポジウムを続けることで、本研究所が旅育についてリードして取り組んでいることが観光産業界や観光学会に対して周知することができ、有意義な事業であった。

<引用・参考文献>

幕内秀夫「食育が危ない」フードアンドヘルス研究所 HP、2007年

(<http://www8.ocn.ne.jp/~f-and-h/books/maegaki.html>)

食育の時間 HP、(<http://www.chantotaberu.jp/>)

森下晶美「海外家族旅行が子どもにもたらす効果を考える」、観光学研究第11号、東洋大学国際地域学部、2012年3月、pp103~114

「旅育シンポジウム報告」東洋大学地域活性化研究所所報 NO.6（2009年3月）pp26~30、同 NO.7（2010年3月）pp23~27、同 NO.8（2010年3月）pp31~36、同 NO.9（2011年3月）pp34~38

東洋大学 地域活性化研究所主催 シンポジウム 旅が育む家族の絆と人間性 Part5 ～未来ある真の“旅育”のために～

今回は、これまで4回に渡り行ってきた“旅育”シリーズの最終回として、未来ある真の“旅育”にするためには何が必要かを考えていきます。プログラムでは、まず、フーズ・アンド・ヘルス研究所所長の幕内秀夫氏に「食育の失敗から旅育は何を学ぶべきか」についてお話をいただき、続く講演では、玉川大学教育学部教授の寺本潔氏に「教育の視点から見た旅育の力」についてお話をうかがいます。

トークセッションでは、これまでのシンポジウムの内容を受けて、本学・松園俊志教授、島川崇准教授、森下晶美准教授によって、未来ある真の旅育のために何が必要なのかを考えます。

【場所】 東洋大学白山第二キャンパス B棟 111 教室

【日時】 2012年12月8日(土) 13:00～16:10

東京都文京区白山2-36-5

(都営三田線「白山」駅より徒歩6分、東京メトロ南北線「本駒込」駅より徒歩10分)

詳しい地図は http://www.toyo.ac.jp/access/hakusan2_j.html でご覧いただけます。

講演者プロフィール

幕内秀夫(まくうちひでお)氏 / フーズ・アンド・ヘルス研究所代表

1953年茨城県生まれ。東京農業大学栄養学科卒業。管理栄養士。学校給食と子どもの健康を考える会代表

山梨県の長寿村を知って以来、伝統食と民間食養生の研究をおこなう。日本列島を歩いての縦断や横断、また四国横断、能登半島一周などを重ねた末に、「FOODは風土」を提唱する。

主な著書：『粗食のすすめ』(東洋経済新報社) その他、多数。

寺本 潔(てらもとときよし)氏 / 玉川大学教育学部・教授

1956年生まれ。熊本大学卒業。筑波大学大学院修了。筑波大学附属小学校教諭を経て、1983年愛知教育大学に勤務。助手、助教授、教授を経て2009年4月より玉川大学教育学部教授に就任。専門は、社会科教育、環境教育、人文地理学。

文部科学省学習指導要領作成協力者(社会：平成10年版、20年版)、中央教育審議会専門委員、国土交通省中部整備局「建造環境から学ぶ総合的学習委員会」座長、愛知万博モリコロ基金委員などを歴任。現在、日本生活科総合的学習教育学会理事、日本社会科教育学会幹事、地図情報センター評議員、内閣府災害教訓普及検討委員会委員、交通エコロジー・モビリティ財団教育検討委員。教科書執筆では、大日本図書的生活科、教育出版の小・中学社会科教科書及び帝国書院の小・中社会科地図帳の著者。

プログラム

13:00～14:00 講演1「食育の失敗から旅育は何を学ぶべきか」 幕内秀夫氏

14:10～15:10 講演2「思考・判断・表現力の幅を拓ける旅育の力」 寺本 潔氏

15:20～16:10 トークセッション「未来ある真の旅育のために～これまでのシンポジウムを受けて～」

松園俊志(東洋大学国際地域学部・教授)

島川 崇(東洋大学国際地域学部・准教授)

森下晶美(東洋大学国際地域学部・准教授)

申込方法

聴講ご希望の方は、①氏名 ②住所 ③電話番号 ④メールアドレスを明記の上、メール又はファックスで12月5日(水)までにお申し込みください。

(本学学生・教職員は申込不要です。)

【主催】 東洋大学地域活性化研究所

【後援】 社団法人日本観光振興協会

申込・問合せ先

東洋大学板倉事務部教学課

TEL: 0276-82-9112

FAX: 0276-82-9801

E-Mail: mlitakyougaku@toyo.jp

入場無料

Toyo University
125th
Anniversary